# 夢の上手な渡りかた

栖里 嘉一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢の上手な渡りかた

【Ｎコード】
Ｎ９８１５Ｏ

【作者名】
栖里　嘉一

【あらすじ】
杉崎俊は平凡な大学生。そこそこ充実した日々を送りつつ、一日の終わりには寝て見る夢を満喫するのがささやかな楽しみで……っても夢の世界に行きたかったわけじゃないけどね！？
長い文章に疲れたあなたに贈る☆寝ながら読める物語。
行き着く先は――保証しませんよ？
※不定期更新※

## 夢の、はじまり

俺――杉崎俊（すぎさきしゅん）は、寝ることが好きだ。

特に夢の世界を探検することが。

大学生にもなって夢見がちなどと笑うことなかれ。

一種の映画を見てるような、実際に触れる感覚もあるし、バーチャルだし？

きちんと日常生活を送っているので問題ないと思う。

単位ギリギリ、バイトに明け暮れ、彼女もいない寂しい生活――を平均のキャンパスライフとするのなら、だが。

仲のいい男友達は大勢いるので決して、つまらないと感じたことはない。

だから満足している。いまの生活を捨てる気はない。

……わけなのだが。

「は？」

俺は訳がわからず思わず声をあげてしまった。

あ、これも夢ね。オーケイオーケイ。

心のなかで自己完結。だけどちょっと勝手が違うのにも気付いていた。

いつもなら目が覚めるまではそんなことは意識しないのに。

「だから、あなた今まで夢のなかで無茶苦茶してきたでしょ」

俺の半分ほどの背しかない少女は、上から目線で俺を諭すように言った。

「夢の世界は、意思がすごい力を発揮する場なの。たとえば、落ちても平気だと思えば、傷一つ負わないし、ナイフで刺されても全然問題ない」

それはなんとなくわかる。

こうなるかもっていうのが、割と反映されるし、恐怖を抱くと、ますます悪夢は加速する。

それが分かると案外夢を渡り歩くのは楽しい。

ある程度のストーリー。はらはらしつつ、いざっていうときには助かるし。

第一、夢から逃げるには、目を開ければいいのだ。

俺はその技も習得している。

本来夢っていうのは眠りが浅いときに見るわけで、瞼に力を入れる

ことで強制的に夢を遮断することができる。

まあ、しばらくは現実感が曖昧になるけど。

「あなたは、そうやって意思の力で夢のなかでの“死”を消してきた。だけどね……」

ババーンと効果音が聞こえてきそうな様子で、少女は俺に人差し指を付きつけた。

「それは確実にあなたの命を削ってきたの」

それはつまり。

「どういうこと？」

「んもう！」

俺の察しが悪いことに、少女は腹を立てたらしい。

いや、いきなりそんなこと言われても、分かりませんよ。

「夢は現実の世界にも影響を与えるものなの。こころと身体は繋がってるんだから。

あなた、今度夢の世界で無茶したら、現実でも死んじゃうよ」

いやいやいや。

あ、これ夢ね。

「オーケイ、オー……」

どうにも認められない、というか認めたくない俺は逃避に走ったが、少女に凄い目で睨まれたので黙った。

もう死んじゃいました、えへ、とかよりはいいのかもしれないけど。

「でもさ、悪夢とか、俺だってそこまでコントロールできるわけじゃないし」

ていうかいい加減聞きたいことがあるんですよね。お前は、誰だ。

「だから夢の世界で生活してもらおうかなって思って」

「はい？」

一瞬理解ができなかった。

それって死ぬのと何が違うわけ？

「それでね……」

「嫌だよ」

少女は口を噤んだ。ふ、と真顔になったのが少し怖いけど、見ないふり。

「俺はいまの生活を捨てる気ない」

「あなた、好きな人いるでしょ」

「……いません」

嫌な予感。

「嘘つかない！」

な、何で知ってるんだ。俺のひとには言えない恋心を。

「彼女とも会話できるよ」

ちょっと心が揺れたのは仕方ないと思う。

「いや、夢のなかで会うからいいのであって。絶対普通に会ったら上手く行かないし」

うん、なんて情けない発言。だからリアルで彼女だけができないんだ。

「大丈夫よ。あっちからしたら端からあなたなんて眼中にないから。ほ～ら、いってらっしゃい」

容赦ない言葉とともに、俺は足場がなくなるという経験をした。

ていうか、結局何したらいいんですか？

## 夢の、はじまり（後書き）

こんな調子で進みまする

## ＯＨ！ハニー（前書き）

お気に入りありがとうございま～す

## OH！ハニー

――あ、ここ知ってる。

目を開けた俺が立っていたのは、見慣れた懐かしい風景だった。

それは実家の最寄りの駅だった。ホームは二つ。電車は一時間に一本あればいいほうで。

電車の扉の前で並ぶなんていう習慣はここではない。並ぶほど人がいないのだ。

だけどこの辺りの田舎じゃ大きい方の駅。特急が停まるしね。

……やっぱ、夢だな。

近づいて、認識を改めた。何階建てだよ、この建物。

言っておくが、俺の田舎には三階以上は存在しないぞ？

ていうかこんな駅実際にはありえないし。都会でも。

四方八方に伸びる線路は上下に上手く交差している。

つぎから次に、発車ベルの音が聞こえてきて、どこかのホームで電車が走り出す。

つい足を運んでしまったけど、俺はどこに行ったらいいんだろう。
どれかに乗ったらいいのか？
得体の知れない場所に連れていかれたらどうする。
もっともここがすでに理解の範疇を超えているわけで、別に構いやしないんだけど。
俺は、この世界で一番してはいけいないことを知っていた。
それは不安に思うこと、そしてマイナスな展開を想像すること。
だから楽観的に捉えようと思っていた。
「遅いよ、シュンちゃん」
穏やかに呼ぶ声に俺は振り向いた。そこに立っていたのは、俺と同じぐらいの歳の青年だ。
こちらをハニーブラウンの瞳が親しげに見詰めていた。
「ええと、どなたですか？」
「ひどいな、冗談でも傷つくんだけど」
ふざけてはないんですね。
ぷぅと、頬を膨らませつつも、少し悲しそうなのを見ると心が痛み

を訴えた。

ん？　この感覚、前にもあったかも。

同じぐらいの男相手のはずなのに無駄にくすぐられる母性本能。

俺の大学の友達にはいない。

「悪い」

「いいよ。それよりほら、行こう」

返答も待たずに歩きだした青年のあとに、仕方なく続いた。

人気なくなってきたんですけど、大丈夫ですか。

いや、悪いこと考えたらダメですね。

それよかなんて呼んだらいいんだろう。

名前聞いたら怒るかな。いや、泣くか。

「なあ、ハニー。これから愛の逃避行だっけ？」

「俺はどっから突っ込んだらいいのかな？」

あ、一人称は俺なのね。

「どこか可笑しなところが？」

「疑問に疑問で返さないでよ」

「言っとくが、さきに聞いたのは俺だぞ」

屁理屈をいう俺に、青年は乱暴な仕草で頭をかいた。あんまり似合ってない。

「もう……。いつまでも寝ぼけたこと言ってないで、しゃんとして」

仕方ないと思いませんか。寝てるんだから。

「ここじゃ常識は通じないからね。意志をしっかり持たないと」

「うーん、なるようになれっていう気持ちも大事だと思うけど」

「心配してるんだよ」

いい奴だな。

名前も知らないけど。でも、分かることもある。

ついたのは裏路地みたいな暗さに包まれたホームだった。乗り場は二つあるらしい。

片方には銀色の電車が停まっていた。二両編成なのがレトロでいい感じだ。

でも、これどうやって乗るんだ？

車体はちょうどプラットホームの大きさに収まっている。つまり今

は天井だけが見えていて、そのまま前に進んだら上を歩けるような状態だ。

俺が首を傾げている間に、青年は反対側の線に向かって立っていた。

横に並んで立つ。

そういえばさっきの質問には結局なんの返答ももらってない。

「なあ……うわっ?!」

ふらついた俺はどうにかしてバランスを保とうと青年の腕を掴もうとした。

だけどそのかいもなく、反転しただけで背中から落下していく。

その先には線路ですよね。もちろん。

俺の視界に映るのはただひとつ。

満面の笑顔。

「またね、シュンちゃん」

遠くから近づいてくる電車の足音が聞こえる。

あれ、これ……

ここでアウトな感じですか？

はやっ！

## OH！ハニー（後書き）

あれ、ハニーってば黒い？

## 扉の向こう（前書き）

おはよう、みなさん

## 扉の向こう

はい、俺は無事です。

五体満足です。

よかった……！！

俺は破裂しそうなほどに脈打つ心臓を抑えて座り込んでいた。

ちなみに電車に引かれても俺は死なないっ、とか思ったわけではない。

ほんの少しだけあの少女の言っていたことが分かった気がする。

現実感がありすぎて、ここだとストーリーを自分の意識だけで曲げるのが難しいんだ。

絶対死んだと思ったし。

それでなんで俺が生きてるのかっていうと、見知らぬ人に助けてもらったから。

実は線路と同じ高さに入口が付いているらしい。

天井しかみえないと思っていた電車にもこっちから乗るんだって。

納得。

俺はこの壁の中から引っ張ってもらったわけですね。

若干首絞まりましたが。向こうの世界は見えてないから大丈夫。

「本当に、ありがとうございました」

俺は礼を言った。黒い布に身を包む老婆はかなり怪しいけれど、ここなら許せる。

「お前さん、この世界の住人じゃないとみえるが」

「ええ、まあ……」

まるきり違うわけでもないはずだけど。ここって俺の夢でしょ？

「ひとつ忠告しておこう。ここでは良心を捨てることだ。そんなつまらないものは、ここで生きていくには必要ない。集団社会など、最初から成立しとらんからね」

「はあ」

良心って人間しか持たないから、進化の途中で身につけたんじゃないかって説があるらしい。

と、大学の教授が言ってた気がする。かろうじて残っている後ろ毛が、彼が動くたびに跳ねるのが気になって正直聞いてないけれど。

確か社会を上手く乗り切るためのスキルってわけ。

でも婆ちゃんが俺を助けてくれたのって良心からだよね。

俺を助けても何も得することなんてないし。

はっ？！　それとも今からカモにされちゃう感じなのか。何も持ってませんけど！

流れかけた思考はすぐに引きもどされた。

「ほれ。こんなところで死なれちゃ迷惑だ。いくら自由の国であってもね」

俺は差し出されたそれをとっさに受け取った。

何かのパンフレットみたいだ。

『面倒なことはすべておまかせ！立つ鳥跡を濁さず☆』

『日々の疲れを癒す樹海への招待～片道切符プラン』

自殺じゃありませんとは言いだしづらかった。

……そういう人、多いのかな？

そういや、さっきの青年は俺に恨みでもあったのか？

いい奴にみえたけどな、とちょっと寂しい気持ちになる。

でも全開の笑顔だったしな、うん……。

そんな俺の落ち込んだ様子にはお構いなしに老婆は立ち上がると、

背を向け歩きだした。

部屋にある階段から上に登れるらしい。

すぐ後からついていくのもどうかな、と思った俺は少し休んでいくことにした。

何気なく室内を見回す。コンクリートの壁だけど殺風景というわけではない。

むしろ物がごちゃごちゃと置いてあって。

梯子とか、模造紙とか。カラフルな衣装とか。

何かの舞台裏みたいな。

使い道の分からないものもたくさんあるけど。

ふと、俺の目は一点で止まってしまった。

見事な金色のウェーブ。パッチリとした碧い瞳。ふっくらした赤い唇。

つるりとした透明感のある肌に、女の子らしい体つき。それを包むのはフリルのドレス。

つまりあれです。

ザ・西洋人形。

……俺苦手なんだよね。こう、刷り込まれた先入観というか。

呪われた館とかにありそうじゃない？

魂とかこもってそうじゃない？

髪は伸びずとも、捨ててもなぜか、元の場所に……みたいな。

そしてついには無表情のまま手足だけが動いて、主人の元へ！

あ、やば。

リアルに想像しちゃった……

よ、ってやっぱりぃいいいい？？

俺は立ち上がった人形を見て絶叫した。

## 扉の向こう（後書き）

じゃ、おやすみなさい☆

（σω－）。ｏ。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9815o/

---

夢の上手な渡りかた

2010年11月24日16時31分発行